

邪馬台国論

2章 『倭人伝』解説

女王卑弥呼

卑弥呼は彦島出身

卑弥呼について、その出自を、『倭人伝』の一文から辿っていくことができる。「壹與」について次の記録があるからである。

卑弥呼以て死す。大いに冢を作る。径百余歩、徇葬する者、奴婢百余人。更に男王を立てしも、國中服せず。更更相誅殺し、当時千余人を殺す。また卑弥呼の宗女壹與年十三なるを立てて王となし、國中遂に定まる。政等、檄を以て壹與を告諭す。

壹與、倭の大夫率善中郎将掖邪狗等二十人を遣わし、政等の還るを送らしむ。因つて臺に詣り、男女生口三十人を献上し、白珠五千孔・青大勾珠二枚・異文雜錦二十匹を貢す。

「壹與」は「卑弥呼の宗女」と説明をしている。「壹與」と卑弥呼は同じ一族という。

「壹與(いよ)」は、「台与(とよ)」とも書かれている。誤記ではなく、彼女には「二名」があったのである。

ここに卑弥呼に迫るヒントがある。

『記紀』「州産み」に「伊豫二名島」という島が現れる。この島の名は、この島の女王が「イヨ」または「トヨ」と二つの名前で呼ばれたからである。故に「二名」という島名となった。『記紀』では「壹與」は「伊豫」、「台与」は「豊」と書かれている。『倭人伝』「壹與」はこの出身である。

では、『記紀』「伊豫二名島」とはどこか。研究者のほとんどは現在の伊予、四国松山市を想定するが、そこではない。『記紀』の「州産み」の舞台を確定するのは容易ではないが、『記紀』神話の舞台の全体像がつかめれば、ピンポイント特定は可能である。

「壹與」の故郷「伊豫二名嶋」はどこか

「伊豫二名嶋」とはどこか。この特定は、『古事記』の簡単な記述だけでできるわけではない。この不思議な名前を持つ嶋を特定するまで、「神武東征ルート」を確定し、東征の全体像を描き、何度も「州産み」に戻って整合するかどうか検証を重ねる必要がある。神武東征行路に当たる「筑紫」が特定できなければ、州産み「伊豫二名嶋」「筑紫嶋」も特定できない。全ては相関関係の中にある。

当初は「伊豫二名嶋」とは彦島全体を想定していたが、「州産み」は弥生国家である。その規模は、例えば「大阪府大阪市北区二丁目五番」という住所で言えば、「五番」に当たるぐらいのものであろう。彦島全体であるわけがない。では、彦島の中のどの島か。

「伊豫二名嶋」とは「面が四つある四角形の島」と書いている。彦島は現在一つの嶋であるが、航空写真で見るといくつかの嶋影が見える。これらの嶋の一つが、古代「伊豫」「豊」と呼ばれた女王の嶋である。

どの嶋か、形状がほぼ四角と見える島でなければならない。航空写真で彦島南部を探したが、適当な島影はない。

しかし、「伊豫二名嶋」を特定できるヒントが神功皇后の歌にあった。神功の歌が「伊豫風土記」に残されている。神功はその歌の中で、「橘の島」という名前の島を歌っている。

神功皇后御歌

橘の 島にし居れば 河遠み 曝さで縫ひし 吾が下衣

此の歌、伊豫の國の風土記の如きは、息長足日女命の御歌なり。

この『伊豫風土記』とは「愛媛県伊豫」の風土記ではない。「州産み」の「伊豫二名嶋」の「伊豫」の『風土記』である。神功は「州産み」の「伊豫の橘の島」に居た。

伊豫の橘の嶋に居るので川が遠い。だから、布を水にさらさないで衣を縫ってしまったことよ

「伊豫」は「橘の嶋」と呼ばれた島である。「伊豫」を見つけるにはこの「橘の島」を探さなければならない。この島がどの島か解明できれば、そこが「伊豫」である。

この島の名前「橘」がヒントとなった。「橘」は通常の意味では「橘の木」である。そうすると、「橘の嶋」とは「橘の木がたくさん生えている島」と想像するであろうが、「橘」は「橘の木」ではない。「橘」とは「立ち鼻」である。「橘」は「立ち鼻」の美字である。

人間の「鼻の形」に見える島があるか？ むろん、現在は単独の嶋ではないかもしれない。しかし、神功の時代には、「島」である。

「橘（立ち鼻）」の島



では、「立ち鼻の島」とは、彦島の中のどの嶋なのか。航空写真で人の鼻に見える島影を探せばよい。

「立ち鼻の島」とは、彦島老の山公園である。老の山公園はまさしく人の鼻の形をしている。鼻があり、口があり、顎がある。人の横顔である。「橋の嶋」とは彦島老の山公園である。ここが「州産み」の「伊豫国」である。

「伊豫二名島」

「伊豫国」が存在した「伊豫二名嶋」は四角い嶋である。老の山公園は人の鼻に似ているが、四角い嶋ではない。では、どの島か。「橋の嶋」と呼ばれた老の山公園の近くに四角い島があるか？

老の山公園のすぐ隣、顎に当たる彦島・老町、海士郷町はかつては島だったように見える。航空写真を拡大してみよう。彦島老町はまさしく四角形である。その四辺には人が住むことができる平地がある。

「身一つにして面四つ有り。面毎に名有り。」と記した『古事記』にピッタリである。

伊豫国・土佐国・讃岐国・粟国

彦島海士郷町、老町一丁目は「小戸山」と呼ばれる山を中心とした四角形の土地である。超古代、隣の老い山公園との間は海であったと思われる。やがて、州が形成され、伊邪那岐命、伊邪那美命の建国物語の時代には陸続きとなっていたのかもしれない。伊邪那岐命、伊邪那美命はこの小さな島の四つの弥生集落を統合した。

伊豫国……愛比売(えひめ)

讃岐国……飯依比古(いひよりひこ)

粟国……大宣都比売(おほげつひめ)

土佐国……建依別(たけよりわけ)

この集落の主は「愛姫」という女性である。

この集落の主は「飯依彦」という男性である

この集落の主は「大宣都姫」という女性である。

この集落は「建」の分国である。

では、これらの国々はどのような配置だったのか。

まず「粟国」と表記される国は、本来は「粟(あわ)」ではなく「泡(あわ)」であろう。「粟(あわ)」は「阿波(あわ)」とも表記されるが、「泡(あわ)」が原義である。

彦島瀬戸は流れが速い。水門(すいもん)が設けられるまでは、流れは直角に曲がり、岸にぶつかって、泡と飛び散っていたと思われる。



彦島老町・海士郷町が私たちが尋ね求めた「伊豫二名嶋」である。

この島の女王は「伊豫の国」と「豊の国」を統治していた。「伊豫の国」とは現在の下関市彦島の老町に当たる。彦島の老の山公園は、「天照」の居所、「高天原」である。

『魏志倭人伝』女王卑弥呼は天照大神の宗族、その祈禱を引き継ぐ神女である。

九州神武天皇家の国々

